

# ホトギス

四月号

五十年刊

創刊二十九年

昭和二十九年

四月号

五月二十日



## 俳句随想〔四百十八〕

汀子

平成二十九年の「ホトトギス」一月号で、新同人の発表があつた。虚子時代の同人。年尾時代の同人。汀子時代の同人と時代を重ねて「ホトトギス」を支え、発展にお力を頂いて来た。この度、廣太郎主宰による新同人の発表があつた。ホトトギス同人には、権利や義務もなく、ただ「ホトトギス」の発展にお力をお貸し頂き、虚子、年尾、そして私の進んで来た花鳥諷詠の道を正しく後進にお伝え頂きたいのである。

これからの若い世代の方々に拠る俳誌は、どの様に進んで行くであろうか。仲良しグループのように集つて俳句を作るが結社には入らないで、ただ、楽しむだけという人々もいると聞いた。インターネットの中の恰好よい表現を借りて作つて自分のものにする、というのもあるらしい。時代が変つたと言えはそれまでであるが、花鳥諷詠の道を歩いて行くために、これまでの先人達が築いて来た道を「ホトトギス」ではしっかり継承して行くであらう。自然の姿を透して私たちは様々なことを学んで来た。温暖化現象に一喜一憂するのも俳句によつてその変化を察知する。

当然、同人に推薦して貰えると思つていたのに、名前がないという方がある。これまでも、そのために俳句を辞めた方があつた。

どうぞ、文句は名誉主宰まで言つて頂きたい。「ホトトギス」で勉強する方々は皆、仲間である。ホトトギス同人は花鳥諷詠を理解し、その姿勢を周りの方々と手を携えて勉強し努力を惜しまない方であつて欲しい。

句日記 汀子

平成二十八年四月二日 芦屋ホトトギス会

旅に発ち旅より帰りチューリップ  
今日別のドライブコース花日和

四月三日 下朝句会

消えさうに消えさうにあり臘月  
初桜たちまひ陽気すすみけり  
病む人を見舞ひ得しこと弥生かな  
みよし野の旅へいざなふ初桜  
この町の花の人の出の日曜日

四月四日 ロイヤル俳壇

鰯も又臘と承知してしまふ  
又逢へて臘ならざる月日あり  
草餅に揃ふ人数ありにけり

四月六日 工業倶楽部

洪滞も花の京都にある至福  
み吉野の旅の近づく花便  
少し荷を軽く弥生の旅路かな

四月八日 虚子忌

明日は又花の旅路へとる忌日  
生涯の臘の日々にある忌日  
鎌倉の花の忌日を新しく

四月九日 吉野くつろぎの旅

山間をただよふ落花又落花  
邂逅や花の吉野の道細し  
一片の落花の誘ふ落花かな  
包まれて花の吐息の中に居る  
谷の宿包む明るき桜かな

四月九日 第二句会

夜桜に包まれてゐる宿に泊つ  
花暮れてしまへば宿の灯に遊ぶ  
今宵泊つ花の氣息に包まれて  
ひそやかに夜の落花のつづくとも  
眠りたる桜に返す夜の帳  
花闇に戻して灯す明るさよ  
これ以上もう頂けぬ花の膳

四月十日 第三句会

寝落ちたる吉野の花に囲まれて  
クリンゲさんペルトナーさん花の宿  
鶯と同じ目覚めでありしかな  
どこまで目花に抱かれぬし睡り

四月十日 第四句会

みよし野の花の別れを重ね来て  
花の旅別れやつばり来てしまふ  
四月十二日 大阪倶楽部  
これよりの日々を語らん桜餅  
麗かや百年といふ歳月も

四月十二日 綿業倶楽部

みよし野の花の余韻の中にゐて  
咲き終るときは淋しきチューリップ  
ほほけたるあり蕾ありチューリップ  
うららかな旅も終つてしまひけり

四月十四日 清交社

真夜覚めて残花を散らす雨と聞く  
あたたかき心集へば晴れし朝  
この晴はさびかりしものあたたかし  
みよし野の花の名残のつづきとも

四月十七日 「松の花」 八百号

惜春の旅路よ地震の遠くとも  
残雪の山見つつ来し祝ぎ心  
チューリップ咲き遅し祝ぎ大地  
自然とはいま惜春の旅心  
旅暮春地震の報道聞くばかり  
地震の地に春めく日和あらまほし

四月十九日 有恒俳句会

郷愁に誘はれゆきぬ桜餅  
惜春の旅路に偲ぶ人のあり  
雪柳にはしだるるといふ心  
惜春や地震の記憶の甦る心  
み吉野の桜餅とや頂きぬ  
祝意抱く日永の旅となりしこと  
四月十九日 無名会  
囀の庭に降り立つこと幾度

旅帰り日永の仕事格動に

囀に踏み込み過ぎてしまひけり  
山々に雪残りぬし越路かな  
ゆつたりと予定組まれて旅暮春

四月二十日 夏潮句会

咲き終りたるチューリップ旅に出る  
水音も囀も風音の中  
あたたかき会の余韻を語らばや  
木の芽吹き移し植糸たる百日紅  
着るものをあれこれ迷ふヒヤシス  
なほつづく地震のニュース春の暮

四月二十一日 アネモネ句会

惜春の心となつて地震のこと  
これよりの月日に春を惜みけり  
この花の散る日吹雪く日あることを  
惜春の心頂く花籠に

四月二十二日 時雨会

地震のこと人事ならず春の近く  
雨止みし春進むとも戻るとも  
あたたかきことがせめてと地震の地  
旅多き日よ春の風邪よせつけず

四月二十三日 句会と講演の会

この辺り昔は海よ松の花  
松の花大地を染めぬ主張  
あと五編書けば脱稿松の花  
四月二十八日 きざらぎ会  
買物をして帰らうか蝶の屋  
明日よりゴルデンラウカ雨の蝶  
もう一ついがが三つ目桜餅  
雨雲より晴れてゆく蝶の空

四月三十日 芦屋ホトトギス会

蝶飛んで野の雨止んでをりしこと  
蝶飛んで塗り替へられし空のあり  
山深く来しこと知りぬ桜花かな  
放談に禁句つぎつぎ暮れ春  
早晩の東京発ちぬ別れ霜  
課せられし仕事の先にある暮春

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年四月一日 カトリック新聞選者時

主の力借りる告白春灯下

四月二日 菅屋ホトギス会

春日傘辻田あづきはベレー帽

四月三日 野分会青屋例会

十字架に見下されたる花の黙  
亀鳴くや賽銭人に借りもして  
春愁を解く満開でありにけり  
花人になり切つてゐる六千歩  
陸橋を下りてより花疲かな

四月三日 青嵐会青屋例会

君と会ひ君と別れて暮遅し  
百千鳥芦屋にもある神の杜  
六甲の端山統べたる百千鳥

四月七日 蕉心会

下町を洗ひ清めて花の雨  
散りたくて咲いてゐたくて花万朶  
今日散るか明日の虚子忌まで持つか  
春の風邪引いたかも熱出てるかも  
春雨に歩道歪んでをりにけり

傘閉づや落花一片巻き込みて  
独り言呟く少女亀鳴けり

四月八日 虚子忌

春泥の忌心ほどに濡れてをり

一片の落花忌心乗せて舞ふ

四月九日 吉野くつろぎの旅

虚子忌終れば満開の旅路かな  
朽ち果てし茶屋の裂け目に亀鳴けり  
如意輪寺まで軽やかに麗かに  
寿福寺に別れ吉野の花下に会ふ  
みよし野の花の歳月とは自在  
みよし野の落花絵巻に包まれて  
ほつほつと過去語り出す人臚  
夜桜を揺らして樂を起す風

四月十四日 土筆会

昨夜の星眠らせ桜目覚めゆく  
鶯の音色生活の一部分  
亀鳴くや日の出前でふ蔵王堂  
何時までも主役でゐたい花と君  
鯉うらら今宵は誰の口に入る  
又詠んで又詠んで又詠んで花

春の月明治の玻璃に歪なる  
木星に主役を譲り春の月  
競ふことなく遠蛙とほかはづ  
四月十二日 むさし野吟行会  
今日よりは東大生や水温む  
東大の新入生といふ歩幅  
花下に佇つ吉田茂と東大生  
松之大廊下跡亀鳴く静寂  
この冷えが大江戸の花持たせたる  
四月十八日 角川「俳句」出句  
縁とは昨日虚子忌で会へし人  
忌に集ひ吉野の花に会ふ絆  
あの人の化身か黄蝶舞ひ止まず  
一片に誘はれ舞ふ落花かな  
閉ざされし茶屋麗かに朽ちてゆく  
夕暮を誘うてゐる落花かな  
開帳に出会ふ縁も如意輪寺

四月十一日 朝日カルチャー若草句会

寿福寺に大いなる忌や花祭  
偲ぶ人多き吉野や春の月

花屑の髪飾ダイヤの指輪  
九十九折標となりし著莪畳  
還暦の歩幅は軽く花の坂  
下向いて咲き上向いて椿落つ  
吉野山光で繋ぐ春の月

四月十九日 北國文芸選者吟

みよし野に出会を重ね花万朶

四月二十一日 登高会

みよし野の残花は風の寄りたがる  
下干本残んの花といふ刹那  
朝寝して夢の続きは謎のまま

四月二十三日 ホトギス社句会

松の花小児喘息たりし頃  
ふらこことを漕ぎ少年に還る四肢  
松の花震災句碑を烟らせて  
大地揺れ半仙戯揺れ心揺れ  
太陽を蹴るまで漕ぐ子半仙戯

四月二十四日 青嵐会東京例会

寺町の路地から路地へ春惜む  
亀鳴くや結婚記念日の句会  
友五人連れて息子の朝寝かな

四月二十四日 野分会東京例会

忘れ霜降りて発ちたる一人旅

猫のタマ犬のポチゐて別れ霜  
みちのくの佳人の嘆き啄木忌

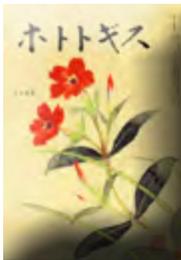
四月二十六日 若水句会

蝌蚪生れて池の表情緩びけり  
草若葉犬の鼻先沈みゆく  
街暮春連休前の静けさに  
祭日の続く聖堂暮の春

四月二十七日 目黒学園句会

宇治駿河八十八夜てふ活気  
エイプリルフルと気付く一年後  
エイプリルフル狼少年来  
春の宵未だ阪神に期待して  
春の宵ワイングラスは下ろし立て  
四月三十日 芦屋ホトトギス会  
みよし野の表情変わりゆく残花

み吉野の残花終業章奏で



# 雑詠

## 廣太郎 選

吹雪く夜や郷愁のごと赤のれん 金沢 藤浦昭代  
 おでん屋へ一度は通り過ぎし歩が 同  
 夜寒急屋台の主も茶碗酒 同  
 珍しや豪雨に煙る五山の火 神戸 後藤比奈夫  
 とらどどころ渴筆雨の大文字 同  
 妙法の法の一点今点り 同  
 熱爛の人をやさしくする熱さ 同 和田華凜  
 冬木立つところ日差を受くところ 同  
 神農の虎待ち合はず戎橋 同  
 大根切る素顔のままである一日 同 山田佳乃  
 大綿の日差に入れば日のかげら 同  
 落鷹の風を零れて来たりけり 同  
 北国もけふは一転小六月 長岡 安原 葉  
 客二三はや庭に見え焚火待つ 同  
 焼べる文胸に焚火を待つ女 同  
 齒応へに浅漬の味ありにけり 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 別れゆく一人一人の冬めきて 同  
 燃え出して煖炉の時間ゆつくりと 同

十八はえースナンバー居待月 東京 大久保白村  
 赤門を前に秋思の八十路かな 同  
 減量の主宰に似合ふ赤い羽根 同  
 足音のして足跡のなき落葉 澁川 山本素竹  
 音を聞かため落葉を踏みけり 同  
 雲までもさざ波となる秋の風 同  
 星影の汀に遊ぶ小夜千鳥 神戸 涌羅由美  
 群千鳥波間に影を置き去りに 同  
 浮寝鳥湖の余白を大きくす 同  
 天帝を侮つてゐる曼珠沙華 福山 竹下陶子  
 神渡星座乱るゝことのなく 同  
 ひと目ぼれは神の導き小六月 同  
 朝寒の風握りしめポケットへ 神戸 立村霜衣  
 湖を釣る大冬晴を傾けて 同  
 まだ残る湯気たのもしく餅届く 同  
 枯芝に寝て来たらしき背中かな 東京 橋本くに彦  
 角帯の旦那の値切る熊手かな 同  
 三尺の熊手手締が送り出す 同  
 少年の風船割れて風すこ 同  
 雨雫ほどの桜の蕾なる 同  
 明るさを空に沈めて花の雨 同  
 北窓を塞ぎ小さくなる暮し 袋井 湖東紀子  
 迫り来るものに北窓塞ぎけり 同  
 浅漬にさらりと済ます朝餉かな 同

# 雑詠句評（三月号より）

静龍・保佳・葉  
とほ歩・眞理子・憲明  
肖子・中正・むつみ  
美奇・廣太郎

## 虚子疎開されたる林檎園案内 神戸 千原叡子

高濱虚子は昭和十九年九月、信州小諸町野岸甲三二八八へ疎開された。そして昭和二十二年十月、足掛け四年ぶりに鎌倉へ帰ったとある。

作者と虚子先生との関係は、虚子先生が疎開先の小諸から三国を経て丹波但馬方面に大旅行されたとき、和田山の作者のお宅へ御泊まりになった。それ以来虚子先生について直接俳句を学ばれお伴をされて京都、大阪、高野山、北陸路、九州等の旅を重ねられていた。虚子先生を知る貴重なお方の一人である。

掲句は、虚子先生が疎開されていた小諸の旧居「虚子庵」（与良町）を見学された後、虚子先生が「小諸百句」にも残された御句の吟行地を巡られた。そのひとつに林檎園の中にあつた「虚子旧居跡地」を案内されたときの御句である。

虚子先生を身近に親しみを持って居られる作者が、先生の歩か

れた畑中の坂の多い虚子の散歩道を巡られ、そこで生まれた御句などを追懐しつつ林檎園を見学されたのである。

虚子先生への思いが一層深まったのであろう。御句の生まれた場所へ旅をしたくなる様な御句である。（静龍）

虚子が戦時中長野県小諸市に疎開していた事はどなたも御存知であろう。長野県といえば、近年美味しいワインが出来る葡萄がより有名になってきたが、やはり林檎も外せない長野県の名産品である。虚子の疎開していた家は現在でも残っているが、それを懐かしんでいる作者の心情が見て取れる。（廣太郎）

## 白菊を足して整ふ虚子の供華 神戸 山田佳乃

「白菊を足して」と云うからには虚子の墓には沢山の花が供えてあつたことが想像される。しかし清楚な白菊をつけ加えることによつて墓前の供華は更に整つたということである。虚子の高潔な人柄を慕う門弟の心が感じられる佳句である。（保佳）

季節の季節を考えると、四月八日の虚子忌ではなく、十月十四日の西の虚子忌を詠まれたのである。関西人にとっては、どちらかというところの十月の方が親しみ深い、と聞いた事もあるが、比叡山横川の虚子を祀る祭壇、また虚子之塔の墓前に供えられた白菊を、心優しく詠んでおられる。（廣太郎）

天地有情

心子選

息絶えし妻との別れ長き夜  
 妻い逝く秋風を聞く夜なりけり  
 月見草三瓶に星を増やしゆく  
 月見草一つ灯して三瓶の夜  
 関東は初雪越は快晴に  
 前山の奥は見えねどすでに雪  
 鷹渡る龍飛岬は北の果  
 去るものは追はぬが掟木の葉髪  
 敬老の日や見渡せば老ばかり  
 敬老の日あとアルツハイマーデー  
 一人ゆき又一人ゆく冬紅葉  
 放牧も今日限りとや冬紅葉  
 人悼む心に種を採りにけり  
 冬川の音立ててゐるひととこ  
 秋行くや老の暮しにぬかりなく  
 先師の忌すませば秋の行く古都に  
 大神の神慮の色冬椿  
 神集ふ出雲に花鳥諷詠詩

仙台 赤川誓城  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 神戸 和田華凜  
 同  
 同 後藤比奈夫  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同

お城まで馬追の径萩の径  
 わけもなく秋潮に手を濡らしぬる  
 散紅葉浄土といふは今日のこと  
 山日和つい冬なるを忘れをり  
 鴨鍋や湖賊の話聞きながら  
 数へ日の水道工事ガス工事  
 年用意済めば手傷の増えてをり  
 しつとりと湯町濡らして時雨過ぐ  
 冬紅葉人生重ねみること  
 冬めくや街の灯りの濃くなりて  
 冬めきし証夜空の美しく  
 億却になることばかり冬めきて  
 もの芽の空にふれむとする辺り  
 さへづりの空休日明るさへ  
 纫殻焼く芳しき香を懐に  
 一色に徹し野牡丹濃紫  
 木の葉散り風は寄処を失ひし  
 冬ぬくきことが心を支へをり

神戸 浜崎素粒子  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 神戸 三村純也  
 同  
 東京 高濱朋子  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 東京 山田閨子  
 同  
 同 今井肖子  
 同  
 吹田 大橋 暁  
 同  
 八尾 梶本佳世子  
 同

## 祈り 稲畑汀子

三笠宮崇仁親王殿下のご逝去をテレビのテロップが報じていたのに気がついた。百歳とのことである。見事なご生涯の中でご縁をいただいた思い出が次々走馬燈のように甦ってくる。

「ホトトギス」創刊百年を迎えた時、新高輪プリンスホテルで祝賀会を開催し、宮様ご夫妻のご臨席をいただいた。開会が近づいてくる緊張感に包まれてホテルの前に我々、一族の者が並んでご到着をお待ち受けした。粗相があつてはならないという緊張感に包まれて行く。

にこやかに車から降り立たれた殿下、妃殿下をお迎えして、お席までご案内する途中、殿下が話しかけて下さったが、何を仰ったか今では記憶がない。すでに着席している人達の拍手に迎えて来て会場に入られた。祝辞の最初は宮様であった。

昭和天皇の弟君である三笠宮殿下は、虚子も出席した十五人会という俳句会で俳句に親しまれて来られた。私が日本伝統俳句協会を設立するとき、事前にご報告するために御所にお伺いしたこともある。ホトトギス創刊百年の祝賀会にお祝辞を賜わり、関連の行事として、初代中村吉右衛門にお頼まれして虚子を書き下ろ

した「髪を結う一茶」と、同じく虚子作の能「実朝」の舞台もご案内することが出来た。興味を持たれて色々ご質問いただいたことが懐かしく甦ってくる。

何年前になるだろうか。芦屋のルナホールで午後、三笠宮家の若宮さまのイベントがあり、芦屋に来られるので虚子記念文学館に寄りたいとのご連絡が入った。

我が家で昼食をお摂りいただくことになったが、慣れているホテルに依頼して準備して貰うことにした。到着される宮様を記念館の前に並んでお迎えしたことも懐かしい。私は学芸員の小林さんとともに緊張してご案内した。子規の日記『仰臥漫録』をお目に掛けると興味深く読み進まれた。子規が書かれた「服薬はクレオソート……」とあるのを興味深く読まれ「私も飲みましたよ……」と言われた。

記念館の展示室をゆっくりご覧いただき、我が家へは待つている車でぐるっと南の道を回っていたかどうかのように、記念館の前で見送りました。

「貴女もお乗りなさい」

宮様が車の中から私に声をかけられた。私は宮様の車をお見送りした後、急いで裏木戸を抜けて、我が家の表へ回り、玄関で宮様をお迎えするべく心積りをしていたのであわててしまった。

「宮様、私は我が家の正面でお迎え致します」

「いいから、お乗りなさい」

と、おっしゃったので宮様に従った。

「はい、では失礼いたします」

正面玄関には我々仲間たちが並んでお迎えしていた。

「宮様、どうぞお靴のまま、お入り下さいませ」

「はいの？」

「はい、そのままお入り下さいませ」

東京で、宮様の御所をお訪ねしたとき、靴のまま通るように言われたことを思い出していた。私も草履のまま上った。

虚子没後五十年を記念して、神奈川近代文学館共催で『近代俳句の夜明け展』子規から虚子へ』を開催したのは今から八年近く前であったか。三笠宮崇仁親王殿下の許にも凶録をお届けしたのをご覧いただいたのであろうか、見にいच्छやるとご連絡が入った。急いで芦屋の虚子記念文学館学芸員の小林さんにも同席してもらい、ご案内することになった。

三笠宮崇仁親王殿下、百合子妃殿下のご臨席をいただき、お待ち受けする我々も神奈川近代文学館の関係の人達も緊張していた。ゆっくりご覧いただき、気さくに質問下さったが、やはり我々は緊張していた。

宮様はすでに九十歳をお超えになられていたと思うが、背筋を

しゃんとされて、とても若々しくお元気だった。

ご逝去の報道を告げるテレビの宮様のお姿は少しお歳をとられ車椅子に乗られていた。百歳の宮様はあれからどのようになされておられたのであろうか。懐かしい思い出を私の胸に残して下さった宮様のご冥福を心よりお祈りして筆を置く。

